

花を贈る

M・F.

花を贈るとき、どのように花を選んでいるだろう。

相手の顔を思い浮かべて、その人が喜びそうな花を選ぶ。その人に似合いそうな花を選ぶ。特定の誰かに贈るものでない場合であったとしても、高価な花を一輪でも入れようとする人もいれば、予算内でもっとも大きな花束になるようにする人もいる。

客人を招き入れる部屋に飾る花であれば、季節の花だろうか。

夏目漱石の『それから』で、代助は三千代を家に呼ぶときに百合の花を部屋に活けた。百合は二人にとって思い出の花であり、代助が二人の過去の時間を取り戻すために用意したものだ。相手のために選んでいるようだが、実は自分の思いを伝えるため、応えてもらうためである。

一般的に、花を贈られたら相手は喜ぶに違いないと私たちは思っている。自分が受け取ったときも、喜ばなければならぬと思う。だが「この花を贈られて、どう反応すればいいのか」と思いつつ、花を受け取ったことが私にはある。

私は、カトレアやバラのような、一輪でも存在感があり、なかでも鮮やかな色の花が好きだった。ところがある舞台に立ったとき、友人のひとりが持ってきてくれたのはノジギクの花束だった。ありがとう、と言いながら私は戸惑っていた。私にとって、ノジギクの花というのは人に贈る花ではなかった。庭の片隅に静かに咲いているのを眺めるぶんには清楚で可憐な花だと思うのだが、人に贈る花は、そのように普段目に触れるような花ではなく、なにか特別ものでなければならぬと考えていた。これを贈るといふのは、いったいどういう気持ちなのか。ベージュの包装紙にくるまれたノジギクの花びらは、元気なのか萎れかけているのかも判断しかねる頼りなさで、私はますます困惑した。

その後、自分が好きな花や、豪華な花束をいただく機会もあったが、そのどれよりも鮮明に思い出せるのは、三十年あまり前に友人にもらった手のひらの上に乗るような短い丈のノジギクの花束なのである。

花を選んで贈ることは、相手の幸せを願う言葉を贈ることと似ている。い

くら相手を思っても、それが相手の望むものとは限らない。受け取った側も、送り手の思いが分からない。自分を大切に思って贈ってくれているのは分かって、どう答えて良いのか分からないまま、ずっと抱え続けることがある。親子など、親しい間柄ほどそうかもしれない。毎日、当たり前のようにかけられる言葉に、いちいち答えようとしていては、まさに身が持たない。だが、ふと、贈られたまま何も返せていないものが自分の中にあることに気づく。すなわち、贈られたものの無限の大きさに気づくのだ。

あるとき、取り立てて大きなお礼をするほどでもないと思ったノジギクの花束だが、返す物が見つからないからこそ、私はそれを抱え続けてきたのかもしれない。

仕事や結婚、子育てに追われて疎遠になっていたその友人から、今年、久しぶりに誕生日に花が届いた。白いかすみ草がメインの花束。私は今もカトレアが好きだ。けれど、かすみ草がカトレアより小さいとは、今は感じない。